

年間第3主日（神のことばの主日）

マルコ 1・14-20

2024.1.21 9:30 ミサ

カトリック高円寺教会

イエズス会 渡辺徹郎神父

今日の福音では、イエスの公生活の始まりが描かれています。公生活というのは公の生活なので、イエスは最初の30年間は、聖書によると大工のような仕事をしていたようです。そのあと、公生活が始まる。つまり、神のみことばを告げることに人生のすべてを捧げる、そういう時を過ごすこととなります。

今日の福音の中で最初に描かれているのは、イエスの宣教メッセージの要約ともいえるものです。「時は満ちた」（マルコ 1・15）と。そして、「神の国は近づいたので、悔い改めて福音を信じなさい」と、イエスはそういうことを言います。

ですけど、皆さん、神の国と聞いて、ピンとききますか？ 「神の国が来た」というのは、例えば日本列島がドドドドって空から飛んで来て近づいて来たとか、そういう感じじゃないみたいです。

「神の国」は——聖書はギリシャ語で書かれています——、ギリシャ語の表記によると「神の王国」と言います。つまり、「神の王国は近づいた」と。ユダヤ教の伝統の中では、神を王とする伝統がありました。その中で、神である王が支配する国が王国なわけです。ここで「王国」って訳されている言葉は、日本列島が来たとかそういうものじゃなくって、「神の支配が近づいた」、そういうニュアンスだそうです。神の支配が今まさに始まろうとしている、と。

そして、「神の国は近づいた」の後半部分は何かということ、「あなたがたは悔い改めなければいけない」と。そして「福音を信じなさい」ということです。福音を信じる——福音というのは良い知らせです——とは、わたしたちを拘束するものじゃなくって、それを通してわたしたちがより良い生き方をするためのものです。そのためには、わたしたちは悔い改めなければいけないらしいのです。わたしたちは悔い改めることを通して、その福音をより良く信じることができる、と。

今日の福音の後半箇所では、弟子の、いや、弟子というよりは、イエスが自身と一緒に働く人のリクルート活動が書かれています（マルコ 1・16-20）。ここで誰を選ぶかというところで、神の国はどんな所かということをおたしたちは伺い知ることができるのかなと思います。イエスが自分と一緒に働く人を選ぶのにどこに行ったかと

いうと、湖のほとりに行ったわけなんです。湖のほとりにいる漁師を自分の仲間として、自分の最初の仲間として誘っています。

これってとても面白いことだと思います。例えば、自分の福音宣教をより良く効率的に伝えようとしたら、政治家のお友だちになるとか、コネクションのある人のところへ行くとか、お金持ちの人のところへ行くとか、そうすれば自分の宣教活動をバックアップしてもらえるかもしれない。イエスは全然そういうことを考えていないんです。本当に普通の人を最初の人として誘うわけなんです。

ここに、わたしたちは神の国の価値観を見出すことができるんじゃないかなと思います。イエスの言う神の国の到来の中で、わたしたちの学歴であったりだとか、社会でどれだけ偉い仕事をしてるとかは全く関係ないんです。そんなのほんと正直どうでもよくて、大事なことはわたしたちがそれを通してどれだけ神と人々に誠実に奉仕することができるかということだと思います。

まさにペトロの仕事っていうのも漁師で、ほんとに普通の仕事です。だけれどもイエスは敢えてそういう人たちを選んではくれるわけなんです。おそらく、むしろそういう政治家にコネクションがあるとか、お金持ちだとか、そういったことってたぶん神の国を生きるのに逆に邪魔になるんだと思います。福音の他の箇所にもそう描かれていますけれども、やっぱりそういう謙遜な生き方のほうが神の国をより生き生きと生きることができる、そういうものなんだと思います。

その意味で、神の国ってとてもフェアな国、公平な国だと思うんです。わたしたちが今この世の中でどんな社会的ステータスにあるとか、お金を持っているとか、全然関係ないわけです。大事なことはわたしたちがどれだけ誠実に神に向かって生きることができるかということで、神さまはそこだけしか見てないんです。

同時に、わたしたちは、神の国に接したときに、自分のすべてを捨てるということです。今日のペトロは、イエスとの出会いが人生の転換点となったわけです。イエスと出会ったときに、彼は網を捨ててイエスに従ったと今日の福音書に書いてあるんですけども（マルコ 1・18）、イエスというのはそういうとても魅力の深い人だったのかなあと思います。神の国のメッセージというのは同時にイエスを通して現れ出るわけです。ペトロはイエスと接したときに、「ああ、この人に自分について行きたい。そのためには今自分の持っているすべてを捨ててまでその教えに殉じたい」という、なんかそういう思いを起こさせる人だったのかなあというふうに思います。

皆さん、イエスってどんな人か考えたことがありますか？ 例えば「秘跡は目に見えない恵みの目に見えるしるし」とかって言うんですけども、わたしたちはイエスを福音書を通して、書簡等を通して、神さまがどんな人か知ることができるんです。こ

のイエスっていうのは、わたしたちの目に見えない神さまが目に見える形となってわたしたちのために現われた。なので、イエスが何を言ったかを知ることを通して、わたしたちは神さまがどんな人かを知ることができる。なので、わたしたちは聖書を通してイエスがどんな人か思い浮かべて、どんな人かなあと考えることを通して、神さまがどんな方なのかということを知ることができるわけです。

ペトロはイエスを通して神の魅力というのに本当に魅了されたんだと思います。福音書の中に出て来るイエスというのはお高く留まっているような方ではなくて、むしろ徴税人や罪人とか言われている人たちと積極的に交わった人、そしてそういう人たちと一緒に食事をするような気さくな方だったんだと思います。そういう気さくな方だからこそ、多くの人が、自分たちに罪意識を持っている人たちも気兼ねなく、気軽に接するようなことができたんだらうと思います。そういうイエスの包容力を見て、神の国の魅力っていうのをペトロは感じたんだと思います。

同時に、イエスがこう言うんです、「わたしについて来なさい」(マルコ1・17)と。神の国の中に生きるっていうのは、道しるべのない世界の中を生きることじゃなくて、具体的にイエスに従うことなんです。この相対的な世界の中では、何を信じていいかわからない。でも神の国は違うんです。神の国っていうのは、イエスに従うこと。それが明確に正しい生き方なわけです。でも、具体的にイエスの生き方を実生活に適用したときにいろいろな難しさがあることは確かです。だけど、根本的にはイエスのメッセージの中に、わたしたちはどんなふうに生きるのか、神の国を生きるとはどういうことなのかということを知ることができるわけです。

なので、わたしたちは神の国を生きるとなったときに、手掛かりのないまま生きるわけじゃない、この福音書の中に告げられている、そして聖書全体や教会の中で受け継がれているイエスについての伝承等々を知ることを通して、わたしたちはどんなふうに生きればいいのか知ることができる。おそらく具体的には神さまと周りの人を大切にすることに要約されると思います。わたしたちはその生き方の実践を通して神の国をより良く生きることができると思います。

ただ、同時に、神の国を生きる、悔い改めるというのは、一人の力ではできません。わたしたちには、そこに神さまの恵みがどうしても必要です。わたしたちがより良く神の国を生きることができる恵みを神に願いながら、このミサを続けましょう。